

鈴木鎮一著「愛に生きる、才能は生まれつきではない」

講談社現代新書 1966年8月16日刊を読む

遊びで始め、遊ぶ楽しさで導く

「家でのおけいこをいやがります。」

1. かなり多くのおかあさんが、こう訴えられる。それは、子どもがヴァイオリンを楽しい遊びであり、自分も遊びたい、という気持ちでやっている子どもの心を知らないからです。月謝を払っているのに、遊びにされたのでは……というおとなの気持ち。つまり、教育に打算がはいり、打算が支配しているのです。失敗する率がひじょうに多い。

遊ぶ楽しさで始めさせ、遊ぶ楽しさで正しいほうへ導く——幼児の教育は、なにごとによらず、ここからなされねばなりません。

2. 粕谷ひとみちゃん——この子は3歳で、毎日3時間ヴァイオリンをひいて育ちました。3つの子に？ どうしてそんなことができるだろうか、と思う方が多いでしょう。

ひとみちゃんのおかあさんは、お人形の代わりにヴァイオリンを与え、いわゆるムードミュージックのように、何度でも、けいこ中の曲のレコードを聴かせた。ひとみちゃんは、ヴァイオリンをおもちゃのようにして1日じゅう遊び、ひとりでひいた。おかあさんがわたしたちの指示どおりに、ちょいちょいと正しく教える。おかあさんもいっしょに遊ぶ。これは教育の名人芸です。

3. 育てばいいのです。“教育だ、”と四角ばったとき、とたんに子どもはゆがみます。まず心を育て、そして能力を身につけさせていく。これが自然の正しい道でした。

こうしてすくすく育った粕谷ひとみちゃんは、昭和39年、5つのとき、小さなヴァイオリンをかかえて、わたしたちといっしょにアメリカへ出かけました。

「毎日5分間と毎日3時間と」

4. 家でのけいこをいやがるのとは反対に、おかあさんの賢い導き方によっては、ヴァイオリンのけいこを、毎日の当然の行事としている例もたくさんあります。

5. ある年の夏期学校でのことです。6つぐらいのお子さんが、とてもいい音で、しっかりと、ヴィヴァルディの協奏曲をひいているのに気がつきました。

「始めてから、どのくらいに？」

と、わたしはおかあさんに聞いてみました。

「1年半でございます。」

「よく育ちましたね。毎日のおけいこはどのくらい？」

「3時間くらいでございます。」

なるほどそうであろう、とわたしは思いました。よくけいこした子は、行動がちがい、音がちがう——すぐわかるのです。

6. 正しい方法による、より多くの訓練。これは能力の育つ原則です。この原則に忠実ならば、必ず正しくすぐれた能力が育つのです。
7. 毎日5分間ずつ練習するひとと、3時間ずつすることと——このふたりを比較してみると、その差は、同じ毎日の練習でも、途方もなく大きい。練習不足のところには、能力は育たないのです。そして、やっただけは正直に育つのです。
8. 毎日3時間のひとの3ヵ月の練習時間を、もし、毎日5分間のひとがやろうとするならば、実に9ヵ月を費やさなければならない。計算すればそういうことになります。一方が3ヵ月でやることに、片方は9年かかる。りっぱな能力の育つ道理がありません。
9. 粕谷ひとみちゃんもそうですが、江藤俊哉君も豊田耕児君も、小林健次君も志田とみ子さんも、みんな、毎日3時間かそれ以上の練習をしたひとびとです。

「能力の育ちは絶対に正直」

10. 「5年もやりました。」

と、だれかがいったとしても、それだけではなんともいえません。毎日の練習がどれほどなされているかが問題です。

5年もやったのに、という。しかし、毎日5分間では、わずかに150時間です。このひとは、「5年間に150時間やったが、どうもうまくなりません。」

というべきです。それなら話がよくわかります。そして、うまくなりませんが、あたりまえなのです。それをたなに上げて、生まれつきだと思うにいたっては、お話にならないわけです。

11. 能力の育ちは正直です。絶対に信頼していいことです。正しくりっぱなことを熟練すれば、りっぱなすぐれた能力となり、まちがったことを熟練すれば、まねができないほどつたない能力として育ちます。

12. 正しくすぐれた道を歩むこと

より多くの、その訓練

この2つのかみ合わせによって、すぐれた能力はだれの上にも育つ。20年間、数千人の子どもたちの育ちをこの目でながめ、その親と先生の優劣をながめてきた結果、このことをわたしは、なんのためらいもなくいうことができます。

[コメント]

スズキ・メソードの創始者、鈴木鎮一先生の教育論。1966年の初版から手元にある2008年12月18日印刷のものまで何と85刷を重ねる名著。「才能は生まれつきではない」とのお考えは、今や日本だけではなく世界に広がる。教育の機会は誰にでも与えられるべきと考えれば、鈴木先生のお考えはこの上なく貴い。日本の教育改革の原点に鈴木先生のお考えをすえて、予算ゼロの教育改革を推し進めたい。

- 2010年2月4日 林明夫記 -